【 書 評 】

「格付けの深層－知られざる経営とオペレーション」

森田 隆大 著

株式会社日本経済新聞出版社

平成22年７月20日刊

本書のテーマである『格付け』については、エンロン事件やサブプライムローン問題においてもさまざま論じられたことは、記憶に新しいところである。また、外資系と日系の格付会社の間における格付けギャップがなぜ存在するのかなど、格付けは、経済又は経営のテーマとしても興味を引く多くの要素を持っている。本書は、その意味で、一般的なビジネス書として読んでも十分に興味深いテーマを扱っており、また、分かりやすい内容となっている。しかし、本書の価値は、むしろ著者が世界や日本における格付市場の歴史的な変遷や格付会社自体の経営などさまざまな角度から検討することで、格付けの本質と限界に迫っているところにあり、本書は、専門的な著作として読んでも優れた内容となっている。

著者は、まず、第１章において格付けとは何かということを、その役割や決定のプロセスなど複数の観点から簡潔に整理し、後続の章における検討内容の正確な理解の基礎としている。その上で、第２章において、20世紀初頭に投資家の需要に応じる形でスタートした格付けが、世界経済の蹉跌や発展の中でどのように今日のようなあり方に発展してきたかを概観している。そして、第３章においては、日本に目を転じ、複数格付けの取得が普及しないことや格付けギャップの存在など日本の格付市場固有の特徴がどのような背景から形成されているかについて考察を進めている。

著者は、1990年からの18年間、外資系大手格付会社の格付けアナリスト及びマネジメントとして格付けの実務に深く関わった経歴を持っている。考察の各所に著者自身の業界内部者としての実感からの視点を明示しつつ織り交ぜているが、それが著作全体に臨場感と厚みを加えている。この点が顕著に表れているのが、第５章から第７章までの格付会社の経営やオペレーション及び分析の実務から見た格付けの考察であり、格付会社の内面的な視点も交えて格付けの本質と限界について深く論じている。終章において、格付手法・モデルの位置付けの変化やこれからの格付規制のあり方など、格付けをめぐる将来課題を提示して考察を終えている。

本書は、ビジネス一般の教養書としても十分に価値があるが、格付けの本質と限界、そして、今後のあり方について、体系的かつ丹念に検討を加えているという点で、公認会計士としての職業的知見を高めるだけの内容の深さを持っている。また、格付けの品質をいかに確保するかという本質的課題を、格付けの歴史的な失敗や規制のあり方などを具体例として考察しているが、こ

れは公認会計士業務の品質の確保にも通ずるものがあり、さまざま示唆に富んでいる。

以上のことから、協会学術賞－ＭＣＳ賞に値するものとして選定した。